

K I T A 掲 示 板

H26年1月11日付読売新聞朝刊（北九州版）にJICA-KITA研修コースが紹介されました。

交流深化 ⑨ 国境を超えて

製鉄から環境に至るまで最先端の技術を生み出してきた都市、北九州市。「我がが技術で地域、世界に貢献を」。その志の下、地元企業OBたちが集まる技術者集団がある。公益財団法人「北九州国際技術協力協会（KITA）」だ。

昨年12月18日、同市八幡西区の市民センターに、肌の色や国籍が違う外国人の男女が集った。国際協力機構（JICA）がKITAに委託した研修事業で、環境技術を学ぶためジャマイカやマラウイ、

「北九州国際技術協力協会（KITA）」新日鉄住金や三菱化学、安川電機といった北九州市に拠点を置く企業のOBたちが所属。環境管理や生産技術、省エネなどの分野で約40の研修コースを作り、それぞれがコースリーダーを務めている。講義や企業の見学、実習を受け入れる企業・団体は市内を中心にこれまで約300を超える。

途上国研修員に北九州流



ごみ処理のコンポストについて学ぶ研修の参加者（北九州市八幡西区の市民センターで）

「国民のボランティア意識が低い」「学校の履修単位で認めてはどうか」。市民の「エコ活動」をテーマに、各国からの参加者は活発に議論を交わした。

13人は昨年10月12月、最先端技術を持つ同市の企業や大学など50か所以上を訪ねて回り、産業・医療廃棄物、家庭ごみの管理やリサイクル技術を学んだ。

KITAは1980年の創設以来、昨年末までに計7343人の研修を受け入れた。アジアやアフリカ、中南米といった発展途上国が多い。今度も、2011年7月に独立を果たした南スーダンから、環境省環境計画官のパヤイさん（26）が参加した。

家庭ごみ収集の計画立案や市民の環境啓発を担当するパヤイさんは「北九州は、市民の意識が高く、ごみ出しのルールも徹底していて、街がとても清潔。ここで学んだ効率的なごみの収集法を、帰った後には早い実践したい」。歩み始めたばかりの国の将来を担う若者は、目を輝かせた。

環境ノウハウ 世界へ

研修のコーディネーターを務めたKITAの指輪勤さん（63）（北九州市門司区）は「北九州には、環境と経済成長を両立するシステムやルール作りの蓄積がある。他国にとって大いに参考になるはずだ」と力を込める。

指輪さんは1年前まで同市などに工場のある三菱マテリアルに勤務。廃棄物管理や資源リサイクル事業に従事し、中国やベトナムなどでの海外経験も豊富だ。退職後に入会したKITAについて、指輪さんは「技術者集団として知識が豊富でノウハウもある。実践的な指導をできるところが強み。私もその一員として社会に貢献したい」と言う。

北九州市は、高度成長期に大気汚染や水質汚濁を引き起こした後、市民や企業、行政が一体となって公害を克服してきたからこそ、指輪さんもパヤイさんらの思いに共感している。

「彼らには、国を動かす責任感や熱意を感じる。研修を通じて、自分たちの技術や知識の『引き出し』を増やしてもらえればうれしい」（手嶋由梨）

この記事・写真等は、読売新聞社の許諾を得て転載しております。

当記事は、無断で複製、送信、出版、翻訳、当の著作権を侵害する一切の行為を禁止します。

読売新聞の著作物については、次のURLで確認できます。 <http://www.yomiuri.co.jp/policy/copyright/>